

國學院大學学術情報リポジトリ

『源氏物語』花散里の初期：
花散里巻から潔標巻までを中心として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木村, 祐子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000843

『源氏物語』 花散里の初期

—花散里巻から滯標巻までを中心として—

木村 祐子

キーワード

「つらし」「おいらか」 醜女 滯標巻 二条東院

はじめに

花散里巻はなくても前後の巻だけで物語展開にさしたる影響もなく、「間奏曲」⁽¹⁾とも評される小巻である。その中でも花散里は中心的人物とは言えない。しかし、本稿では当巻に描かれた片鱗のような姿の中に、後の彼女につながる重要な側面を見出し得ることをまず指摘したい。

花散里はその呼称が登場当初は麗景殿女御姉妹の邸、或は姉妹を指し、花散里のみの呼称ではないことから、⁽²⁾それが一義的に定まる須磨・明石巻以降、或は松風巻以降から考察の対象とされてきた。⁽³⁾それは呼称の問題と共に花散里巻の「三の君」にさしたる存在意義が存するとはこれまで見られてこなかったことも大きい。しかし、花散里巻における「三の君」が六条院夏の町の女主人花散里であることは確かであり、花散里巻から幻巻まで物語の主筋との直接的な関わりは薄いながらも、個性的に形象化される人物像全体を把握するためには、その始発を検討の対象外としたままでよいのか、疑問が残る。本稿では、これまで呼称の問題等により対象外とされてきた感のある花散里巻から滯標巻までの花散里を中心として、また自明のこととして余り問題とされてこなかった源氏の側からの花散里との関係も含めて、花散里を考察の対象として取り上げる。⁽⁵⁾

確かに、花散里巻では彼女の内面は直接語られることはなく、登場場面もただでさえ短い巻の中でも少ない。しかしながら、語り手が花散里の心中にあると忖度する「つらさ」が何なのかは明確に説かれていない。また、当巻には『伊勢物語』六十段の引用が指摘されており、⁽⁶⁾それがその「つらさ」とどう関わるのかは問題となるだろう。

そして、明石より帰京後、源氏の花散里との関係が変容していく点に注目したい。濤標巻での帰京後の三年ぶりの再会において花散里の心情は、彼女自身の源氏に対する態度・言葉によって直接読者に伝えられるが、その内容は注目に値する。花散里はこの再会において、源氏に対し自己の立場を明確に表明したと考えられる。何故、従順で控えめとされる彼女にこのような言動がこの時だけ可能になったのか。それについてはより源氏と花散里の関係性に即した双方向からの読みが必要となるだろう。

一 待つ女の苦悩

花散里巻は賢木巻から須磨巻へと激動する政治情勢の間に挿入されているが、酷薄な政治情勢は背景に退き、恋の情趣に身を委ねる光源氏の姿が描かれてゆく。当巻に登場する源氏が「過ぎがてにやすら」った中川の女、続いて想起される筑紫の五節、そして訪問先の麗景殿女御、その妹三の君、後に花散里と呼称されるこの女君も、皆その存在は花散里巻まで語られたことも匂わされたこともなかった。巻末近く花散里は、

まづ、女御の御方にて、昔の御物語など聞こえたまふに、夜更けにけり。（中略）西面には、わざとなく忍びやかにうちふるまひたまひてのぞきたまへるも、めづらしきに添へて、世に目馴れぬ御さまなれば、つらさも忘れぬべし。何やかやと、例の、なつかしく語らひたまふも思さぬことに、あらざるべし。

〔花散里〕②一五五―七頁⁽⁷⁾

と登場する。

源氏はまず、麗景殿女御を訪問し、女御と語らい、歌を贈答している。一方、花散里とは、当巻では贈答はない。それは一見、花散里の「非自立性」⁽⁸⁾と受け取れる反面、「まずは女君の近親者との贈答から描き出される関係」であり、それは後に「六条院の夏の町の女主人として処遇されていく女にふさわしい格式を保った登場の仕方」と見ることも可能だろう。⁽⁹⁾

源氏は夜更けて三の君の許を訪れた。ここには語り手による推測ではあるものの、彼女の心中に「つら」しという思いがあったが、源氏の「わざとなく忍びやか」な「ふるまひ」に癒され、忘れたであろうと語られている。「つらさ」はこの時、源氏の訪問によって束の間、彼女の心から消えたかに見えるが、源氏が去ればまたすぐに復活し、彼女の中に常住するであろうことは疑いない。ではここに語られた「つらさ」とは何だろうか。それを見極めるためにこの少し前に花散里が源氏の「例の御心」に苦悩していたと語られていることに注意したい。

御妹の三の君、内裏わたりにてはかなうほのめきたまひしなごりの、例の御心なれば、さすがに忘れもはてたまはず、わざともてなしたまはぬに、人の御心をのみ尽くしてたまふべかめるをも（以下略）

絶えるというわけでもなく、かといって表立った待遇もしないという、女性にとってはこの上なくつらい状況におかれ、源氏に対し物思いの限りをし尽くしていただろうと語り手は花散里の心内を推測している。源氏の方は軽い気持ちで始まった関係であったとしても、花散里としては源氏だけを待つ身である。関係が継続される限り、女君にそれなりの待遇を求める切実な心情があったとしても不思議ではない。

「つらし」とは他者からの仕打ちによって生じる堪え難く辛い思いをいう語で、主として男女関係に用いられる。⁽¹⁰⁾「つらし」は『源氏物語』には一九七例あるが、夕顔を取り殺した物の怪の源氏に対する恨み言、⁽¹¹⁾亡霊となった藤壺の源氏に対する恨み言、⁽¹²⁾死霊となった六条御息所の源氏に対する恨み言の中に「つらし」が見出せる。これらはいささか極端な例とは思われるが、「つらし」は物の怪の本心を表す言葉でもあった。⁽¹⁴⁾そして、当該記事では花散里の苦悩を表す言葉でもあったのである。

引き続き花散里の「つらさ」の内実について追究していきたい。花散里巻には『古今和歌集』夏・一三九番「五月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」、そしてこの歌を中心にして物語が展開する『伊勢物語』六十段の引用が指摘されている。⁽¹⁵⁾そして、さらに光源氏との関係を生きたる花散里、その関係を絶つ中川の女について、共に『伊勢物語』六十段から生まれた「分身」であるとも捉えられている。⁽¹⁶⁾

『伊勢物語』と花散里巻との相違は、『伊勢物語』では女の内面に全く触れられないが、花散里巻ではその「分身」とされる中川の女、花散里、共に詳述とまではいかないがその心内に触れている点であろう。中川の女については、知らぬふりをしたため去っていく源氏を

思い、「人知れぬ心にはねたうもあはれにも」と直叙され、花散里については語り手の推量という形で前述したように語られる。

待つことに疲れた中川の女は源氏に心を残しつつ背を向け、花散里は源氏を待つ苦悩を抱えて生きる。そして、待つ女の系譜は『伊勢物語』以外にも辿ることができる。六条御息所の造型は道綱母の苦悩を先蹤とすることは、表現上からも詳細に論じられているが、さらに既に経過した御息所の物語から、花散里などの待つ女の苦悩を補い読むことができる⁽¹⁷⁾とされる。女としての心の葛藤や苦悩から淡々とさりげなく、別次元に生きているように見える花散里もまた、女としての苦悩を抱えて生きていたことは、その心中の「つらさ」が証しているだろう。

源氏は当初、御息所に熱心に求愛した。それに対し、花散里との関係は源氏にとって「はかなうほのめきたまひしなごり」であり、比較にならない。しかし、馴れ初めの男君の情愛がどれほどであったかは、関係が続いて行く限りにおいては、女君にとっては余り問題ではない。ただ一人の男君を待つ苦悩としては本質的に変わりはないからだ。

花散里もまた道綱母や御息所と同じ待つ女の苦悩をし尽くしていた。御息所と花散里は素性、境遇、性格、そしてそれらによって生じる源氏との関係性の相違により深刻さに位相差があるというべきだが、その苦悩の根は同じと見てよい。花散里は控えめで穏やかな性格とされているが、しかし、その登場の始めに、このような女としての重い苦悩が心中に存在することが語られた意味は、決して小さくはないだろう。

二 関係性の変容

源氏と花散里の関係は、その後、変容していくと考えられ、その推移を物語表現から辿っていききたい。須磨へ退去するにあたり源氏は麗景殿女御姉妹を今一度訪問した。そして、以後も後見のない姉妹の世話を続けている。その後、源氏は許されて帰京したが、政務等多忙となったため、文ばかりで花散里を中々訪問できずにいた。⁽¹⁸⁾そして、いよいよ源氏は花散里を訪問した。少々長くなるが本稿にとって重要な意味を持つ場面なので引用する。

かくこの御心とりたまふほどに、花散里をあれはてたまひぬるこそいとほしけれ。公事もしげく、ところせき御身に思し憚るにそへ

ても、めづらしく御目おどろくことのなきほど思ひしづめたまふなめり。五月雨つれづれなころ、公私もの静かなるに、思しおこして渡りたまへり。よそながらも、明け暮れにつけてよろづに思しやりとぶらひきこえたまふを頼みにて過ぐいたまふ所なれば、いまめかしう心にくきさまにそばみ恨みたまふべきならねば、心やすげなり。年ごろにいよいよ荒れまさり、すごげにておはす。女御の君に御物語聞こえたまひて、西の妻戸には夜更かして立ち寄りたまへり。月おぼろにさし入りて、いとど艶なる御ふるまひ尽きもせず見えたまふ。いとどつましけれど、端近うちながめたまひけるさまながら、のどやかにてものしたまふけはひいとめやすし。水鶏のいと近う鳴きたるを、

水鶏だにおどろかさずはいかにしてあれたる宿に月を入れまし
となつかしう言ひ消ちたまへるぞ、とりどりに捨てがたき世かな、かかるこそなかなか身も苦しけれ、と思す。

「おしなべてたたく水鶏におどろかばうはの空なる月もこそ入れ

うしろめたう」とは、なほ言に聞こえたまへど、あだあだしき筋など疑はしき御心ばへにはあらず。年ごろ待ち過ぐしきこえたまへるも、さらにおろかには思されざりけり。「空ながめそ」と頼めきこえたまひしをりのことものたまひ出でて、「などて、たぐひあらじといみじうものを思ひ沈みけむ。うき身からは同じ嘆かしさにこそ」とのたまへるも、おいらかにらうたげなり。例のいづこの御言の葉にかあらむ、尽きせず語らひ慰めきこえたまふ。

〔落標〕②二九七―八頁〕

ここでまず気付くのは、花散里が源氏を「ながめ」の姿勢、つまり源氏の訪問を待ち受けるという態勢ではなく、所在なく思いに沈んだ様子で庭を眺めているという姿で迎えていることである。このような花散里の源氏に対する姿勢は以前からだっただろうか。

源氏が須磨へ退去するに際しての訪問は次のように語られていた。

西面は、かうしも渡りたまはずやとうち屈して思しけるに、あはれ添へたる月影のなまめかしうしめやかなるに、うちふるまひたまへるにほひ似るものなくて、いと忍びやかに入りたまへば、すこしゐざり出でて、やがて月を見ておはす。またここに御物語のほどに、明け方近うなりにけり。(中略) 例の、月の入りはつるほど、よそへられて、あはれなり。女君の濃き御衣に映りて、げに濡る顔なれば、

月影のやどれる袖はせばくともためても見ばやあかぬ光を

いみじと思いたるが心苦しければ、かつは慰め聞こえたまふ。

「行きめぐりつひにすむべき月影のしばし曇らむ空ながめそ

思へばはかなしや。ただ、知らぬ涙のみこそ心をくらすものなれ」などのたまひて、明けぐれのほどに出でたまひぬ。

〔須磨〕②一七四（五頁）

花散里は須磨下向に際しての訪問では、「すこしるざり出でて、やがて月を見ておはす」という姿勢で迎えている。そして、その美しい月の光をそのまま源氏に喻えて、源氏を引きとめたい思いを込めて歌を詠む。それに対し源氏は花散里を慰める歌を返していた。

濡標卷の再会の場面に戻る。帰京後、初の対面の今、「ながめ」の姿勢で迎える点とある点に、須磨巻との明らかな差が見て取れる。この姿勢には花散里のいかなる心の内が現れているのだろうか。もっとも、物思いに沈んだ姿で源氏を迎える姿は源氏に対し以前より自由を獲得しているとの印象がある。源氏はその様子を大変好ましいと見ていた。

ここに引用した須磨・濡標卷における源氏と花散里の二組の贈答歌について、花散里の贈歌を中心に見てゆきたい。引用した両巻の贈歌の歌ことばから、花散里が「自己の立場」を保持していることの主張を読み取る見方もある^②。また、それが常に花散里からの贈歌である点を重く見て、そこに女からの贈歌に対する通常の「関係に対する危機感の表れ」といった捉え方を超えて、「光源氏の女性関係の相対的な軽重が表されている」との見方もある^③。確かに源氏の花散里への思いは深いとは言えない。この訪問には須磨下向以来三年余りの時間が過ぎてしまっているが、その久し振訪問も、源氏にとってはやっと「思しおこして」というものであった。もっとも、それは余りにも途絶えを置いた故の引け目も加わっていたのかもしれない。

一方、花散里としてはここに取り上げた贈歌については、まず源氏に詠みかけた動機があったと考えられる。須磨の場合は「かうしも渡りたまはずや」と「屈し」ていたところへの訪問であったこと、いつまた会えるとも知れぬ別れを目前にしていたことから、花散里にとっては唯一の「光」である源氏を目の前にして、詠みかけずにはいらなかった心情も理解できる。

濡標卷の引用に戻って、このような長い途絶えを置かれた場合、「心にくきさまにそばみ恨」む歌や文を送ってよこすのが当時の普通の「いまめかし」い女性であったとされているが、花散里は「めづらしく御目おどろくことのなき」性格なのでそんなことはしない。な

ので源氏は安心して語られていた。その彼女が源氏を前にして贈歌したのには、それなりの理由があるのではないか。当該では花散里はまず前述したように、「ながめ」の姿勢で迎えていたし、またこの後、源氏に注目すべき発言をしており―源氏の方は気にしていないようだが―それらを和らげるためにも、一方では彼女からの贈歌あったと推測されるのである。

その花散里の「などて、たぐひあらじといみじうものを思ひ沈みけむ。うき身からは同じ嘆かしさにこそ」の発言を取り上げたい。花散里卷では、語り手の推量という形でしか語られなかった花散里の心内が、今や直接、彼女の言葉で伝えられている。まずは源氏と須磨下向の際の逢瀬の話をしてから、帰京後の無沙汰について、「どうして（あのお別れの悲しみを）他にはありえないと嘆き悲しんだのでしょう。情ない私の身では、今も京を離れておいでになった時と変わらぬ嘆きで過ごしております」と言う。三年ぶりにやっと再会した源氏に、何とこれまでの自分の思い―待つ女の苦悩―をそのまま伝えていた。それは言い換えれば自己を主張するということになるだろう。「ながめ」の理由もこの「嘆き」―昨年秋に帰京し今は夏―にあったということなのだろうか。何とまあ率直な物言い、そして振る舞いなのだろう。源氏はそんな花散里を「おいらかにらうたげなり」と見ている。そして、離京の間、待ち続けてくれたことを重く見て、「さらにはおろかには」と考えている。このような両者の関係をどのように捉えたらよいのだろうか。

花散里卷卷末には次のように語られていた。

仮にも見たまふかぎりは、押し並べての際にはあらず、さまざまにつけて、言ふかひなしと思さるるはなければにや、憎げなく、我も人も情をかはしつづ過ぐしたまふなりけり。それをあいなしと思ふ人は、とにかくに変わるもことわりの世の性と思ひなしたまふ。

（「花散里」②一五七―八頁）

「憎げなく」に『新編日本古典文学全集』（小学館）の頭注は、「長い途絶えがあったからといって、それを憎げに言動に表したりすることもなく、の意。源氏と変わらぬ関係を持ち続ける女を賞讃する気持である」とする。待ち続ける苦悩を態度に現したり、言葉でぶついたりすること、即ち自己を主張することは「憎げ」であり、源氏との関係が続けるためには、それは慎まなければならない。これはあくまでも一般論として語られているが、花散里もまた自らを抑え、源氏に気持ちよく接し、自己を主張しない女性として、登場以来、過ごしてきた。しかし、今、それとは一八〇度異なる彼女の言動を我々は目にしている。待ちに待った源氏の帰京が実現しても、中々訪れてくれない。その苦悩を今、さらりとぶつけている。これは彼女が源氏に対し確実に自分の立ち位置を保持していることの現われでは

ないだろうか。

しかし、源氏はそれを「憎げ」には見ていない。「捨てがたく」「おろかには」思うことはできないとしていた。源氏に自己を主張する余り悪感情を抱かれてしまったら、花散里の負けだが、そうではない。花散里は自己を主張しつつも良い関係を保持している。それは花散里が源氏に対し、余裕をもつて接しているからだろう。花散里は何故、心に余裕を持つことが可能になったのだろうか。その余裕とは一体何なのか。源氏が花散里を「おろかには」思うことはできないとしているが、それは具体的にはどういうことなのか。それについては次章で考察する。

三 発言のタイミング

何故、花散里は三年ぶりの再会において、これまでの生き方―「憎げ」には接しない―を変更し、源氏にこれまでの苦悩の片端を伝えたのだろうか。一つには、源氏が花散里を余りにも待たせてしまったことへの幾分の負い目があり、それを花散里が察知していたということが考えられる。花散里は源氏のこのような思いを文などから察して、年来心にくすぶっていた源氏に対する不満の片鱗を、この際吐き出したのだと受け取れるだろう。花散里が自己を主張しても源氏が悪感情を抱かないのは、彼にこのようなちょっとした引け目があり、花散里はそれを見抜いていたからだと推測される。

いま一つの理由として、この頃、物語に登場する源氏の二条東院造営計画について取り上げたいと思う。花散里は西の対が与えられることを、それまで知らされていなかったのだろうか。源氏の東院造営計画については、「花散里などやうの心苦しき人々住ませむなど思しあててつくろはせたまふ」〔滯標〕②（二八四―五頁）と示される。「思しあてて」⁽²³⁾とあることから、細部はともかくとしても、此処に唯一名前の挙がっている花散里については、この段階で東院の西の対を与えることが、決定済みだったと見てよいのではないだろうか。全く計画抜きに建築に至るとは考えにくい。帰京後、源氏は多忙を理由に花散里に無沙汰を続けていたが、前述したように、文だけは通っていた。花散里は源氏からこの沙汰を文で知らされていたとも受け取れるだろう。

二条東院造営の意図については、

一、花散里や五節のようになかつて交渉を持った女性たちを集めること。

二、明石姫君の住まい。

三、新たな子供の出現を期待して。

という、主として三点があげられる。⁽²⁴⁾このうち、二と三については実現せず、一が現実化して花散里は東院に移り住んだ。東院のこのようなあり方については、二、三を中心とした視点から論文があり、総じて物語の本筋である二の明石の物語からの論考が多い。⁽²⁵⁾

さて、東院の西の対を与えるということは如何なる待遇を意味しているのだろうか。二条東院の詳細な配置が明らかにされるのは、松風巻の巻頭二条東院完成時であった。

東の院造りたてて、花散里と聞こえし、移ろはしたまふ。西の対、渡殿などかけて、政所、家司など、あるべきさまにしおかせたまふ。東の対は、明石の御方と思しおきてたり。北の対はことに広く造らせたまひて、かりにてもあはれと思して、行く末かけて契り頼めたまひし人々集ひ住むべきさまに、隔て隔てしつらはせたまへるしも、なつかしう見どころありてこまかなり。寢殿は塞げたまはず、時々渡りたまふ御住み所にして、さる方なる御しつらひどもしおかせたまへり。

〔松風〕②三九七頁

これについては「西の対に家政事務所があるということは、花散里が東の院の奥方待遇をされている」ということであり、一方、花散里が「寢殿に入れなかったことは」「正式の夫人とは認められなかった」ことを意味しているとされる。⁽²⁶⁾ところで、花散里が源氏に望んだことは、然るべき妻妾としての待遇と愛情だったと思われる。この待遇は源氏の多くの妾たちの中で、現在正妻格の紫の上に次ぐ位置であることは、花散里も理解できたであろう。これは紫の上のような愛も地位も与えられるべくもないと考えていたであろう彼女にとっては、願ってもない待遇であったと思われる。先の引用にも、「年ごろ待ち過ぐしきこえたまへるも、さらにおろかには思されざりけり」とあったが、これは具体的には東院の主人はあくまでも源氏だが、彼女が東院一の女君として待遇を受けることを指しているだろう。これは彼女に自信と余裕を与えることになる。そのような待遇が与えられることを前提として、三年ぶりの再会において、花散里特有の穏やかな物言いの自己主張が可能となってくるのだとも受け取れる。源氏との関係において、決して自己を主張しなかった花散里が、自己の立場を明確に展開しうようになったのは、彼女が源氏の生活世界の中にそれなりの座席を得たことの反映なしには考えられない。その代償として何だが、彼女は通常の夫婦の関係はもはや断念しなければならなかった。東院に入居した花散里の新春の様

子が

東の院の対の御方も、ありさま好ましうあらまほしきさまに、さぶらふ人々、童べの姿などうちとけず、心づかひしつゝ過ぐしたまふに、近きしるしはこよなくて、のどかなる御暇のひまなどにはふと這ひ渡りなどしたまへど、夜たちとまりなどやうにわざとは見えたまはず。ただ御心さまのおいらかにこめきて、かばかりの宿世なりける身にこそあらめと思ひなしつつ、ありがたきまであうしろやすくのどかにものしたまへば（以下略）

〔薄雲〕②四三七（八頁）

と語られている。源氏とのこのような関係を花散里は「かばかりの宿世なりける身」と受け入れているという。源氏は先の引用の滯標巻の再会において「例のいづこの御言の葉にかあらむ、尽きせず語らひ慰めきこえたまふ」と、細やかな愛情を見せていたが、しかるべき待遇を与えた後、夫婦関係は再び変化してしまっているようである。花散里は「思ひなしつつ」とあるように、それを自らの心に強いて折り合いをつけて受け入れたのだ。そして、「つつ」とあることは、折り合いを付けることが彼女の中で繰り返されていたことを示している。

それはより大きな視点から見れば、六条院体制構築に向けた物語の構造的変化に伴うものとも捉えることができるだろう。来るべき六条院では紫の上こそが源氏第一の女君であることは動かしがたい。身分・寵愛において優っていても子を産んでいない養母紫の上と、実母明石の君を、光を挟んで直接対峙させないためにも、明石の君より身分は上で寵愛において劣る花散里のような女君の存在が必要になってくるのだろう。

そんな花散里は「おいらか」と語られる。先の滯標巻でも「おいらかにらうたげなり」とされ、以後第一部ではしばしば彼女は「おいらか」と形容されていく。⁽²⁷⁾「おいらか」は一筋縄ではない言葉で、⁽²⁸⁾この場合も、花散里のあくまでもうわべのみを捉えたものと言えよう。花散里は根っからの女を超越した慎ましさの権化のような女性ではなかった。自抑的な生き方は自ら選び取ったものであった。その後、花散里は六条院が完成すると夏の町の女主人として迎えられる。

結び

花散里と源氏の関係性の変容にも何らかの内的必然性があり、それを物語の中から読み取っていくべきだろう。源氏は明石より帰京後、急激に「政治的に変貌」し⁽²⁹⁾、それに伴い藤壺との関係も変容したとされたが、それには内的必然性が担保されていたこと、物語に表立って語られてはいないものの、そう読み取れるように仕組まれていることを指摘したことがある⁽³¹⁾。

花散里は帰京後の源氏との三年ぶりの再会において、実に率直に自己の胸の内を吐露した。このような発言が可能となったのは、時期の問題が深く関わっている。源氏は離京後三年、帰京後も長いこと（半年以上一年未満）訪問していない。花散里はそれを源氏が幾分の負い目と感じていたことを見抜いていたということなのだろう。源氏がバツの悪さを感じており、二条東院が完成の暁には殊遇が与えられることが確実となったこのタイミングにおいて、花散里の一見、変貌と受け取られる言動が可能となったということなのだろう。他の女君といえ、末摘花は源氏の愛情を求める余り無礼な歌を贈ってしまい、源氏に辟易されていた⁽³²⁾。また、六条御息所は死後、死霊となつてはじめて源氏に対し、自己主張というか恨み言を言うことができたのだ⁽³³⁾。

『無名草子』で花散里は、「好ましき人」「好ましういみじきなり」⁽³⁴⁾と評されている。その理由は、容貌は劣っているものの、「めでたき人」に交じりながら世間の評判も引けを取らず、源氏の嫡男夕霧を養子にしたことがあげられている。概して、花散里の評判は現代でもよい。それは彼女の穏やかな身の処し方に負うところが大きいだろう。

そのような中で初期の呼称の不確定性から、また花散里巻においては主要人物とは見えないことから、初期の花散里については「源氏の周辺にあつて、源氏と何らかの関係をもっていた大ぜいの女性たち（中略）の総代的性格」を有する⁽³⁵⁾とする説が通説となっている。一方、第一部玉鬘十帖の蜚巻の源氏との対話における花散里に拠る人物評、第二部夕霧巻の夕霧との会話における彼女による源氏評等から、従来とは異なる花散里の内面や「したたかさ」が見えてくるとされる⁽³⁶⁾。そして、本稿が読み取った初期の花散里―花散里巻から漂標巻―の造型にも、待つ女の苦悩を抱えて控えめながらも、源氏の心情を的確に見抜き機を見るに聡いという、観察力・人間洞察力に優れた後の彼女につながる才が確実に形象化されているといえる。また、源氏が東院の女主人としたことについても、後に六条院において発揮されることになる彼女の家刀自としての実務能力が、この時先取りされたと受け取ることも可能だろう。本稿では初期の花散里の人物造型

のみに焦点を絞ったが、その後の彼女については、稿を改めて論ずる用意がある。

注

- (1) 岡崎義恵氏「花散里の物語」（『源氏物語の美』宝文館一九六〇年）
- (2) 藤村潔氏「花散里の場合」（『源氏物語の構造』桜楓社一九六六年）
- (3) 田坂憲二氏「花散里像の形成」（『中古文学』一九八三年五月）は松風巻以降を、辻和良氏「花散里の〈陰〉——したたかな女」（『源氏物語の王権——光源氏と〈源氏幻想〉』新典社二〇一一年）は須磨・明石巻以降を対象とする。田坂氏は夕霧巻の夕霧と花散里の対話を取り上げ、そこにはこれまで見てきた花散里像とは異なる彼女の内面の可能性が瞥見されるとする。辻氏は従来の花散里の温厚でつましげな性格という把握では捉え切れない面に焦点をあて、光源氏世界の相対化が六条院における彼女の場から生み出されるとする。両氏の論は花散里造型論に新局面を開いたと言える。なお、花散里巻論の研究史については、細野はるみ氏「橘の花散里——花散里巻——」（『源氏物語講座』第三巻 勉誠社一九九二年）に整理されている。
- (4) 細野はるみ氏は「花散里巻には古今集的な夏のポピュラーな情趣はすべて出しつくしている」と述べている。「花散里をたづねてぞとふ」（講座 源氏物語の世界）第三集 有斐閣一九八一年）このことは彼女が後に六条院において夏を象徴する女君として遇されることにつながっている。
- (5) 花散里については、醜女という方向性からの民俗学的研究として林田孝和氏「源氏物語の醜女——末摘花・花散里の場合——」（『王朝びとの精神史』桜楓社一九八三年）があり、また機能という面から紫の上の分身であるとの見解も出されている。山田利博氏「花散里の機能」（『源氏物語の構造研究』新典社二〇〇四年）
- (6) 三谷邦明氏「花散里巻の方法——〈色好み〉の挫折あるいは伊勢物語六〇段の引用——」（『物語文学の方法Ⅱ』有精堂一九八九年）
- (7) 『源氏物語』の引用は『小学館新編日本古典文学全集』に拠る。括弧内は上から巻名、シリーズの巻数、頁数を示す。以下も同じ。
- (8) 小町谷照彦氏「花散里」（『国文学』一九六八年五月）
- (9) 高木和子氏「光源氏の女君の最初の歌」（『女から詠む歌 源氏物語の贈答歌』青簡舎二〇〇八年）
- (10) 「つらし」については、山崎良幸氏「『つらし』の意義」（『源氏物語の語義の研究』風間書房一九七八年）、及び鈴木日出男氏「心情語『うし』『つらし』（源氏物語の文章表現）至文堂一九九七年）を参照した。

(11) 「おのがいとめでたしと見たてまつるをば尋ね思ほさで、かくことなることなき人を率ておはして時めかしたまふこそ、いとめざましくつらけれ」〔夕顔〕①一六四頁

(12) 「漏らさじとのたまひしかど、うき名の隠れなかりければ、恥づかしう。苦しき目を見るにつけても、つらくなむ」〔朝顔〕②四九五頁

(13) 「わが身こそあらぬさまなれそれながらそらおぼれる君は君なり

いとつらし、つらし」〔若菜下〕④二二六頁

(14) 藤田麻葉氏「つらし」(林田孝和他編『源氏物語事典』大和書房二〇〇二年)

(15) 注6に同じ。

(16) 高木和子氏「『源氏物語』と『伊勢物語』の生成の論理」(『源氏物語の思考』風間書房二〇〇二年)

(17) 高田祐彦氏「道綱母から六条御息所へ」(『源氏物語の文学史』東京大学出版会二〇〇三年)

(18) 注16に同じ。

(19) 花散里などにも、ただ御消息などばかりにておぼつかなく、なかなか恨めしげなり。〔明石〕②二七六頁

(20) 注3の辻氏の論文。

(21) 通常、花散里作とされる和歌は六首あるが、そのうちの一首「荒れまざる軒のしのぶをながめつつしげくも露のかかる袖かな」〔須磨〕②一九六頁は、花散里作か麗景殿女御作か、必ずしも明らかではない。藤村氏(注1の論文)、辻氏(注2の辻氏の論文)は女御説をとる。また、合作を示唆する説もある(高木和子氏「作中歌は誰のものか」(『源氏物語再考』岩波書店二〇一七年)。残る五首はいずれも贈答歌の贈だが、源氏との贈答歌はここにあげたものを除いて二首あり、それを左にあげる。

その駒もすさめぬ草と名にたてる汀のあやめ今日やひきつる〔螢〕③二〇九頁

夏衣たちかへてける今日ばかり古き思ひもすすみやはせぬ〔幻〕④五三七頁

(22) 注21の高木氏の論文

(23) 秋山虔・室伏信助編『源氏物語大辞典』は「思ひ当つ」に「考えて割り当てる」の意をあげている。

(24) 日向一雅「六条院世界の成立について―光源氏の王権性をめぐって―」(『源氏物語の主題』桜楓社一九八三年)

- (25) 二については多数の論文があり、注24の論文、及び秋澤互氏「二条東院」（『源氏物語を考える―越境の時空―』武蔵野書院二〇一一年）などに整理されている。三については伊井春樹氏「五節と花散里の登場の意義―おもふさまにかしづき給ふべき人（落標卷）の構想と二条院から六条院造宮の展開について」（『源氏物語論考』風間書房一九八一年）に拠る。

- (26) 『源氏物語評釈』第四卷六七頁

- (27) 他の例としては、「おいらかに気色ばまぬ」（少女）③八〇頁、「おいらかにのたまふ」（玉鬘）③二二八頁）があげられる。

- (28) 「おいらか」については木船重明氏「紫式部の精神的展開と源氏物語の達成」（『源氏物語の研究』一九六九年）、及び注2の田坂氏の論、相澤京子氏「おいらか」（林田孝和他編『源氏物語事典』大和書房二〇〇二年）等。

- (29) 伊藤博氏「『落標』以後―光源氏の変貌―」（『源氏物語の基底と創造』武蔵野書院平成六年）

- (30) 清水好子氏「藤壺宮」（『源氏の女君』増補版 塙書房昭和四二年）

- (31) 拙稿「光源氏の転機―藤壺との関係性における―」（『文学・語学』二〇一五年二月）

- (32) 「きてみればうらみられけり唐衣かへしやりてん袖をぬらして」（『玉鬘』③一三七頁）

- (33) 注13参照

- (34) 『無名草子』の引用は『新潮日本古典集成』に拠る。

- (35) 注2に同じ

- (36) 田坂氏による夕霧卷の人物評については、注3の田坂氏の論文要約参照。辻氏は注3の論において蜚蜚・夕霧卷の人物評等から、花散里の「したたかさ」―負性―を読み取る。また、蜚蜚の「競射」や源氏との贈答歌に注目し花散里の造型の有り様を考察した論に針本正行氏「『源氏物語』「蜚蜚」巻の花散里」（『國學院雑誌』一九九九年十二月）がある。